

## 本性を見る眼 — 靈感の心理学Ⅱ —

### はじめに

靈感とは微細で微妙な知覚／認知をいう。

靈感の一部は、五官（目・耳・鼻・舌・身体）や五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）を超えた知覚の働きである。超えたというより、それら以前かもしれない。

そして、靈感は、五官と五感で作る日常的意識状態をはみだす意識状態につながっている。

私が本研究シリーズで靈感という言葉を使う時には、主として次の三種類の知覚の様式を考えている。それらは、直観（感）、イメージ、身体サインである。

直観（感）は五官のみならず、五感にもよらない知覚である。われわれは、ただ直観（感）する。（ものごとの本質をずばりと見通す時、日本語では直観という漢字を使う。虫の知らせのような直接的感受性を言う時、直感の字を充てる。英語ではどちらも intuition である）

直観（感）が働くと、結論がふつとやってくる。それを受けとるわれわれは、なぜか、ある種の確信をもつ。そのくせわれわれの多くは、現実場面では、その直観（感）を当てにしていまいかどうか自信がない。推論の根拠や過程が、本人にも見えていないからである。さらに、ふ

だん直観（感）を使うことが少ないのも、経験による磨きがかからないから、自信のなさを産む一因になっているかもしれない。

第六感といわれる知覚は、おそらくこの直観（感）を指すのであろう。

直観（感）が超五官／超五感であるとすれば、イメージは、五官という感覚器官にはよらないものの、五感による表象が伴う知覚である。それゆえ、五官による現実性は薄い、五感で構成されているだけに、直観（感）に較べて具体性に富む。映像・音声・匂い（臭い）・味・身体感覚―ただし、仮想の現実ではある。

〈第三の眼〉で象徴される靈感とは、このイメージや直観に開かれているかどうかをいうのであろう。

すると、夢は、睡眠（レム睡眠）という意識状態が〈第三の眼〉として働くことよって開かれるイメージ体験、と定義することができよう。

身体サインは、生身の身体を媒介とするだけに、前二者と比較してより現実的に感じられる。身体を通して、特定の身体感覚が知覚される。あるいは、（意図しない）身体の動きによって、何かが表現されている。五官や五感を超えた知覚が使われるわけではない。しかし、それらを追っていけば、その先には常識を超えた意味やところが

鈴木 研二

示唆されている。

身体は、身体各部（五体、目、鼻、耳、首、へそ……）から成り立ち、頭と首から下、右と左、中心と末端などの部分に分割される。そのそれぞれが、象徴的な意味を担っている。同様に身体感覚は、温感・冷感、重さ・軽さ、だるさ、痺れ、痒み、痛み、吐気……などとして感じとられ、そこにも象徴の意味が伴っている。動きは、運動だけでなく、呼吸、発汗、排尿、排便、発声……などとして表出され、やはり象徴的な意味を担っている。

身体 of サインを身体言語と呼ぶこともある。

これらは、直観（感）やイメージと同じように、人体が未知の何かを知覚し・表出しているサインとして受けとれる場合があるのだが、現代人の多くは、こうした身体 of サインを、病気になるいはちよつとした異常としかたええない。治療の対象にはするものの、未知なる何かを感じずして受け止めることは、まずない。

身体 of サインは、知覚されても、現代人の認知の枠組からこぼれ落ちてしまう。

この点では、実は、夢もイメージも直観（感）も似たような状況におかれている。現代人がそれらを重視して、それらの先々に意味やこころを追究することは、心理療法という特殊な場を除いては、まずないといつてよい。

さらに――。ことは人体だけではないかもしれない。世界そのもの――ものとこと――が、こころや意味を象徴するサインとして働いている可能性がある。身体 of サインにならつて、これを世界のサインと呼べば、人間の身体もはたまた世界も、読みとる気になれば、絶えずわれわれの五官に訴えかけるサインを発している、ということになる。こういう認知のしかたが占術一般の見方である。そして、そこに働

いていると想定される原理は、共時性と呼ばれるのである。

直観（感）、イメージ、身体 of サイン。そして夢、世界のサイン――共時的現象。以上が本研究シリーズの、主要な関心の対象である。

## こころは見えないか

「心理学」という言葉を初めて聞いたのも、小学校に上がる前だったと思う。文脈は記憶にない。心理学がこころのことを研究する学問だと知るや、私は、「それならオレはわかる」と思った。理由も何もなく、ただそう思った。確信すらあった。

子どもの私は、おとなの嘘を見抜くことにかけて自信があった。考えてみればそれが、「オレはわかる」と思った理由だったのかもしれない。例えば、幼い頃、私が風邪をひいたとする。布団のそばでおとながひそひそ話をしている。「お医者さんは呼ばないで」と頼むと、「呼ばないよ」と言う。だが、そのうち医者は来ている。「注射はやだよ」「注射はしない」。けれども、どんなに泣いても暴れても、私の意思とは関係なく、押えられ、注射をされる……。

注射もだが、私は、おとなが嘘をつくのがいやで、見たくなかった。嘘がバレると、力づくで意志を押しつけてくる。子どもの気持は大切にされない。気持が通じない。おとなは人の姿をしているが、本当は人間ではないのかもしれない。

嘘をついているおとなのこころが、子どもの私には見えていたのだと思う。

今でもどこかで見えている気がする。

## 愛

私の同僚で臨死体験をした男がいる。彼はその後、人に会うと相手に愛があるかそうでないかを感じとるようになった、という。子どもの私がおとなの嘘を感じていたように、彼は病院の見舞い客や医療スタッフに、愛のあるなしを感じ分けていたらしい。

どうやってそう感じるのか、と訊かれると答えに窮する。これが直観（感）を説明する際の難しさである。ただそう感（観）じる。

どうやるかは説明困難だが、人間は誰しも、多少なりとも、それに類する経験をもつことはあるように思う。目が見るように、耳が聞くように、われわれは直観する。

例えば、私の同僚の言う愛である。彼を引き合いにだすまでもなく、私にも、愛に関して直観するところがないわけではない。

自分以外の人が私たちに関心を示す時、私たちは、自分のどこが注目されているのかを自ずと感じとる。この、他人が私たちに示す関心が、広い意味の愛であろう。そして、どこかに応じて、愛には種類／質が区別される。私はそれを、

- ① 部分愛
- ② ありのまま愛
- ③ 中心愛

と、三つに分けて考える。

① 部分愛は、どちらかというと表面的な愛である。私たちの見てく・れ、へ見られる自分へが主に注目されている。例えば身なり。美貌。性的魅力。社会的地位。家柄、学歴。金や財産。身体能力。才能。親切

さ・やさしさ。将来性……。それらは魅力と呼ばれる。その一つまたはいくつかに関心がもたれ、愛着される。そうした愛着の背景には、愛される側の魅力とともに、愛する側の欲求が色濃く介在している。

部分愛は、したがって、欲得ずくの強力な愛である。愛する方は無私ではない。愛の強さは欲求によって彩られ、当事者双方の事情に応じて変化する。

部分愛の代表的な例は、子どもが親に向ける愛、逆におとなの子どもに対する父性的愛情、男女間の性愛、などである。

これに対して、②ありのまま愛というのは、表面的・部分的な愛を超えている。愛の対象となるのは、相手の存在／こころの全体である。そうなること自ずと、愛する側の関心の質も変化する。

部分愛が、真・偽、善・悪、美・醜のそれぞれ前者に向いがちな肯定的感情であるとすれば、ありのまま愛は後者も引くくめた全体、存在そのものに向う関心／配慮／肯定感である。

母親が胎内の子どもに向ける感情にその原形が認められる母性愛が、ありのまま愛の典型例であろう。いいも悪いも引くくめた、相手の存在に対する丸ごとの敬意・愛着である。

図2-1において、部分愛が表面の目立つ部分に向けられる愛着だとすれば、ありのまま愛は、目立った白い部分も陰の暗い部分も合せた図の全体像に向けられる。そして――存在／こころの全体、そのありのままが見えるようになった眼には、自ずとその中心も映しだされてくる。部分愛が相手の魅力と自分の欲求

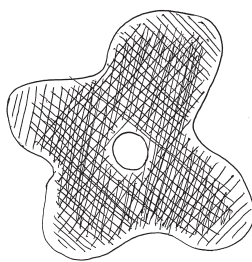


図2-1 心の全体性  
(表面／暗い部分／中心)

を媒介にし、ありのまま愛が相手の全体性と主体の側の無私を仲立ちに成り立つとすれば、③中心愛は中心と中心、魂と魂の間に生起するエネルギーの交流である。

「士は己を知る者のために死ぬ」という。この場合の己が、中心／魂である。魂を引っ掴まれるような、この人のためなら、いざとなれば命を投げだしても惜しくないと思わせ（れ）るような愛。それが中心愛である。

一方が、相手のところ／存在の中心を見抜いていなければ、この関係は始まらない。眼力が必要なのである。この眼力は、無私にしてこの中心に居坐る直観の働きである。

すると、見抜かれた方も感（観）じる。これが中心と中心の感応、魂と魂の交流である。

私は、禅の師と弟子はこれをやるのだと思う。

愛される立場に身を置くと、三種類の愛はおおよそ区別がつく。部分愛は嬉しい。自分の魅力に自信がつく。しかし、どこか満たされきらない不安なところが残る。部分愛が自分の一部分だけに向けられていて、しかも、相手の欲求によって移ろいやすい愛だからである。

ありのまま愛は包みこまれるような穏やかな愛である。部分愛の強烈さ・喜ばしさよりも、〈ありがたい〉という感じが伴う。そして安心感がある。

最後の中心愛は感動する。しかし、なかなか言葉にならない。心地よいのか、痛いのか、それさえ区別がつけ難い。体験するにしくはない。

自分のどこが注目されているのかは、こうやって、言葉になってもならなくても、私たちは子どもの時からうすうす感じ分けている。し

かも、愛を受けとる際の直観は、その種類／質とともに、愛を寄せてくる相手のありようまで、われわれに教えてくれる。欲絡みか、それとも無私か、さらに中心／魂とつながっているのかどうか、まで。

### 狼の眉毛

むかし、たいへん貧乏な人がありました。食べものも何もなく なって、こんなことでは生きていても仕方がないから、狼に食い 殺してもらおう、と思つて山へ行きました。夜になって狼が出て 来ましたが、男を見ても食おうとしません。こんなはずはない。 どうしてわたしを食つてくれないんだ、と男は狼に話しかけ ますと、狼がいうことには、おれたちは人間をみればどんな者で も食うとは限らない、人の姿はしていても本性は畜生であるもの だけを食うので、お前のように本当の人間を食うわけにはいかな いのだ、ということでした。男は不思議に思つて、同じ人間の姿を しているのに、本当の人間と、そうでないものと、どうして見分 けられるのか、ときくと、狼は、それはこの眉毛で見ればわかる のだ、といつて一本、抜いてくれました。男はそれをもらいまし たが、やれやれ、狼にも殺してもらえぬとなれば、遍路にでもな るよりしようがないと思ひ立つて、四国遍路に出かけました。あ る所で一軒の家に宿を借りようとして立ち寄りますと、その家のお 爺さんはここよく泊めてくれようとしたのに、お婆さんが出て 来て、いやな顔をして断ります。その時、男は狼からもらった 眉毛のことを思い出しました。さつそくためしてみようと思つ て、ふところから例の眉毛をとり出して眼に当てて見ますと、お 婆さんの姿は牛に見えました。なるほど狼のいったとおりだと感



心して、お爺さんにも眉毛をかせてみせてやりますと、やはりお婆さんの代りに牛が見えたということであります。<sup>\*1</sup>

## 本性

愛を受けとる子どもの直観は、その愛の質だけでなく、それと結びつく相手のありようも見抜く、と書いた。この、直観によってとらえられる相手のありようこそ、ここにいう本性にほかならない。欲絡みであるか、無私か、中心／魂からか。

すると――引用した昔話は、人間の子どもがしていることを狼もやっている、というふうに読むことができる。欲絡みを畜生に、無私／中心／魂からを本当の人間に置換えれば、先ほどの議論と昔話が重なり合う。

人間は、おとなになると、人の本性を知ると、子どもや狼や臨死体験に学ばなければならないらしい。

## 貧乏ということ

昔話の主人公も、実は、死に瀕していた。①「たいへん貧乏」で、②「食べものも何もなく」、③「こんなことでは生きていても仕方がない」というありさまであった。

③の記述からすると、彼は心理学的には抑うつ状態で、希死念慮がある、と見られよう。

抑うつ状態は心的エネルギーの水準が極端に低下していることを意味する。それは、②の記述に見られるように、エネルギー源となり心身を満たすはずの食べものも何もないからである。これを心の問題と

して解釈すれば、彼には氣持を満たす何物もなく、欲求や意欲はもとより、エネルギーそのものが涸渇しかけている、と見られる。

以上が①に遡って、「たいへん貧乏」ということの内容である。だからこの男は死に瀕している。

しかし一方、だからこの男は狼に食われない。(欲求も意欲も消えていて)、私利私欲／欲絡みで動いていないからである。

エネルギーもなければ、頼るものも、誇るものも、彼には何もない。そもそも、彼の私自体が、狼に食わせないほど消えかけている。だから、彼は謙虚である。裸一貫なのは生れた時の赤ん坊と同じである。

「たいへん貧乏」とは、赤ん坊あるいは死にかかった人のように無一物、謙虚、執着すべき特定の対象が何もなく、考えようによつては、死を含む、畜生と人間の全ての可能性に開かれた状態、と言える。

昔話の出発点におけるこのありよう――貧乏／無私無欲――が、主人公の、子どもや死にかけた人と共通する点であろう。

そして、それはこの昔話の狼にも共通する意識状態であるらしい。というのは、ここでの狼は、「おれたちは人間をみればどんな者でも食うとは限らない」と言っている。彼らも自分の欲求(私利私欲)だけで動いているわけではない、というのである。

ところで――なぜ男は狼に食われようと思ったのだろうか。

この箇所、私には釈迦の捨身飼虎が思い浮ぶ。釈迦はその前世において、身を捨てて、飢えた虎を養ったという。こうして彼は転生し、ゴータマ・シッダッタに生れ変わった。一方、われわれの昔話の主人公は、食われることなく生き延び、四国遍路の旅にでる。

両者に共通するのは、身を捨てて動物に食われようとするのが、仏教修行の通過点だった、というあたりであろうか。

私は、この話を次のように考える。

人は、何らかのきっかけで自我の働きが停止して、無私無欲の状態に近づくと、それまで見えなかったさまざまな可能性に開かれるようだ。ちょうど、昼間の太陽が沈むと、夜空に、それまで見えなかった星々が一斉に現れるようなものである。日常的な生活の意欲が消失することにより、死も、動物的欲求に呑みこまれたという衝動も、一段と輝きを帯びてくるようだ。そうなって初めて、中心／魂も、成仏の可能性も、眼前に開けてくるのだと思われる。

そこで――虎に食われれば虎にもなり、「狼にも殺してもらえぬとなれば、遍路にでもなるよりしようがない」と思うのであろう。

貧しいとは、まずもって無私（＝自我意識の停止状態）である。その時、中心／魂が見当らないと、その貧しさ感はますますつのる。そこで動物的欲求の前に身を投じたくなるのは、ことの自然かもしれない。

## 狼の判断

象徴学的には、狼は貪欲を表すといわれている。他には、攻撃性、群居性、夜行性。むろん、動物的本能も狼によって象徴される。すなわち、狼は動物的欲望の塊である。狼に言わせれば、自分こそ畜生中の畜生である、となろう。

しかしこの狼、ただの畜生ではない。

畜生中の畜生のはずが、この昔話では、自分の欲望だけで動いているわけではない、と言いだす。ここが面白い。

欲望だけでないのなら、他に何があるというのか。どうやら、ここでの狼にはある種の判断が働いている。「人の姿は

していても本性は畜生であるものだけを食べる」という。先ほどの、「人の姿はしていても愛がない」、あるいは、「人の姿はしていても平気で嘘をつく」という言葉をここに並べてみれば、この狼が死にかけた人や子どもと共通のある意識状態を生きていることは、納得がいくかと思われる。

どうやら、ここに現れた狼も、「聴き耳」に登場する雀や鳥と同じく、沈黙の知の担い手らしい。<sup>\*2</sup>（とすると、死にかけた人も子どもも、その点では同類か、ということになる）

さて、そこで狼のこの判断である。

「聴き耳」の雀や鳥は、人間のことを利巧なようではか、と言つてのけた。この話の狼は、多くの人間のことを、人の姿はしていても本性は畜生、と見ているようだ。

これはどういふことか。

ここにあぶりだしのように浮び上がってくるのが、再び人間の自我意識である。

人は自我意識が確立すると、ものごとをはっきり認知する。これが人の自我意識の最大の特長である。言葉や論理や常識に支えられ、まるで昼間の太陽の下でものごとを見るように、はつきり知るのである。しかし、自我意識とそれが照らした日常的世界（両方合せてOSC）だけがこころの全てかというところではない。ASC、中でも小論で沈黙の知と呼んでいる深遠な意識状態がある。だが、そこは、自我意識の強烈な光によって、昼間の星々のようにかき消されてしまう。

自我意識は、自分でASCをかき消しておきながら、自分の光で認知されるものごとしか存在を認めないという偏狭さをもつ。本性も愛も、沈黙の知そのものも、見えなくさせられ、ないことになる。

自我意識が最もよく認知するものごとといえば、他人の外見と、自

分の欲求や損得である。

したがって、自我意識の発達した人間（Ⅱオトナ）は、他人や世間の目を気にして人の姿をとりつこう。その実、私利私欲に衝き動かされ、損得計算に余念がない。

この自我意識こそが、人を人にもしたのだが、反面、「人の姿はしていても本性は畜生」にしている元凶である。だから、自我意識の確立していない子どもと、自我意識の停止しかけた臨死状態の人は、例外なのである。

人間は難しい立場におかれている。自我意識が育たなければ、人は動物のままである。しかし、自我意識が確立すると、人は動物の頃から知っていた沈黙の知が見えなくなる。かき消された沈黙の知の中に、「本当の人間」らしさもあるらしい……。

主人公の男は、たいへん貧乏だったことと関係して、自我意識が機能を停止しかけた状態にあったらしい。そこで、狼と会話もでき、狼に「本当の人間」と判断されたのだろう。

しかし、本人は、どこが本当の人間なのか、よくわかっていなかったにちがいない。だから、後々四国遍路にでかける必要があったのだと思われる。

「本当の人間」とは、自我意識の働きが止って、沈黙の知にはいつていく先々で、自覚される何かであろう。

## 眉毛

直観は突発的に閃いて、根拠も何も示さないから、人を納得させにくい。靈感の中では、イメージの方がまだ説得力がある。だから狼は、男にわからせるのに眉毛をもちだしたのだろう、と私は思う。

そこで、この昔話のタイトルにもなっている狼の眉毛について考えてみる。まずこれは、人間の本性をイメージで捉える手段である。土地によって、眉毛が睫毛になっっている類話があることからすると、小さな細い毛であればよいのかもしれない。

なぜ眉毛で見ればわかるのだろうか。

眉毛や睫毛は、もともと、汗や埃から目を保護する働きをする。しかし、それらがあり目に被されれば、ものは見えにくい。子どもの頃、顕微鏡を覗く際にレンズの焦点が合わず、私は自分の睫毛ばかり観察していたことがある。こういう時は邪魔である。さらに、薄目で辺りを見ようとすると、睫毛でものがよく見えない。

これらの経験からすると、狼のくれた眉毛や睫毛というのは、視覚を明瞭にしない道具なのではないか、という気がする。「眼に当てて見」と対象がぼやける。ちょうど聴き耳や聴き耳頭巾が、聴覚を半ば遮断する機能をもっているように、狼の眉毛は、視覚を半眼状態にする働きをもつのだろう、と考えられる。

人の本性を知るには、外見など目に映るものにばかり集中するのではなく、五官を半分ばかりがいいのだ、というのが狼の教えであらうか。

坐禅の半眼もこれに通じるように思う。

こうすることによって、五官／五感の働きが抑制され、それらと結びついた自我意識が弱められる。日蝕が引き起されるのである。すると、靈感の働く余地が生れ、色や形のない人間の本性が、知覚化／映像化されやすくなるのであろう。

狼の眉毛を目に当てることは、貧乏であることと同じく、自我意識が弱まり、人は子どもや死にかけた人に近づくのであろう。

## 遍路

われわれの昔話の主人公は、その後、四国遍路に出かける。

狼の言う「本当の人間」は、自我意識を一旦停止した人、つまり、外見にとらわれず、無私で、あるがままを生きる人であった。そういう人は何にでもなれる。どこにでも行ける。それで釈迦の場合のように、悟りを開く最終地点にいく人もでてくる。

すると、自我意識を一旦停止した地点は、新たな出発点である。狼や虎に食われようが食われまいが、社会的自我としてはここで一旦死に、その後再出発せざるをえない。さて、どこに向うか。

四国の四は死にも通じるといわれる。また、遍路／巡礼とは、中心への旅であり・回帰である、といわれる。男は（社会的人間として）一旦死んで、死の国の中心に旅（回帰）するのだ。もっとも、遍路であるから、彼はその後再び俗世に戻ってくるつもりもあるにちがいない。

死んで、聖地／中心に回帰し、そこでいのちを得て、帰還する。――ユング派はこれを死と再生と呼ぶ。

この男もまた、一人の仏陀になるのであろうか。

## お婆さんとお爺さん

四国に死と再生の旅にでて、最終的に彼が何に出会い、何をもち帰ることになるのかは、ここには書かれていない。

しかし、彼の旅の手がかり足がかりが、狼の眉毛（人の本性を見ること）になるであろうことは、容易に想像がつく。男の旅は、いろいろな人の本性を見る旅になるのであろう。

本性が畜生の人にも、さまざまなちがひがあるだろう。この昔話にでてくるお婆さんのように本性が牛の人、類話によっては、古雌鳥、蛇、百足、狸……と数々いる。欲のあり方が、人によって多少ずつちがうということだろうか。

「本当の人間」にしてもさまざまなものではないか、と私は思う。その辺はこの話には書かれていないが、道中いろいろな人々を見ていく過程が、この男の「ありのままを知る旅」になるのだろう。

すると――男はいつか、自分がこうなりたいというイメージやそれを体現した人物に出会うだろう。それが中心／魂である。そして、そこがこの遍路の目的地である。同時に、帰還の旅の始まる地点でもある。

この旅において本性を見る眼は、前にとりあげたところを聴く耳と同じく、主人公の男にとって、貴重な羅針盤の役割を果たすにちがいない。

次いで、男はお爺さんに眉毛を貸して見せている。ここには問題が一つ隠れている。

というのは、引用した話のように眉毛を貸す類話と、貸さない／貸すのを禁じられている類話があるからである。実は聴き耳（頭巾）についても似た事情があり、聴き耳の秘密（聴き耳自体のことも、それによつて知った内容のことも含まれる）を人に漏らすと、その人は死ななければならない、とされている類話が数多い。

つまり、狼の眉毛（聴き耳も）を他人に貸したり、その秘密を口にすることは、相当な危険を冒すことにつながる、という含みがあると考えられる。

どのような危険があるのかを推察しておきたい。

狼の眉毛にしても聴き耳にしても、その秘密に触れることは、触れた人をふつうの人ではなくする。

彼または彼女は、靈感を通して沈黙の知に接触するのである。自我意識／日常的意識状態（OSC）を一旦機能停止させて、沈黙の知／変性意識状態（ASC）にはいる、と言ってもよい。

これは死と再生のプロセスの始まりにほかならない。OSCで死んで、ASCに目覚める。そこで新たないのちに出会い、再びOSCに戻れば、これが再生である。外から見ると、ふつうの人として死んで、ふつうでない人（沈黙の知の担い手）として生れ変わった、となる。

沈黙の知の担い手——これが古のシャーマンである。現代であれば、宗教者・霊能者・研究者・芸術家・冒険家・治療者……であろうか。彼または彼女は、人類にとって貴重な新しい知をもたらす人である。と同時に、危険人物・怖い人・ふつうの人の秘密を暴露しかねない困った人、人々を惑わす者でもある。しかも、カリスマ性がある。自分の知に確信をもつあまり、あるいは人々を動かす自分の力に酔うあまり、思い上がった人になるかもしれない。

とすれば——。秘密を漏らそうが漏らすまいが、人は狼の眉毛——沈黙の知と接触することによって、象徴的に「死なねばならぬ」。さらに、一旦死んでふつうでなくなった人は、ふつうの人との関係で、危険な二面性をもつ人物になる。すると今度は、危険人物として、政治的にも「死なねばならぬ」破目に陥ることがある。

そういう二重の危険性——ふつうの人でなくなる危険性と、ふつうの人とうまくつき合えなくなる危険性——が待っているのである。

お爺さんもまた、男に狼の眉毛で見せられて、新たな死と再生のプロセスを歩みだすことになるのかもしれない。

## 註

\*1 柳田国男『日本の昔話』角川書店 一九五三、より引用。ただし、ふり仮名は省略した。

\*2 この点に関しては、次の論文を参照されたい。鈴木研二「こころを聴く耳——靈感の心理学Ⅰ」（『茨城キリスト教大学カウンセリング研究所紀要第26号』二〇一〇、所収）

\*3 関敬吾『日本昔話大成 3』角川書店 一九七八。



## The Third Eye: Psychology of ESP (Part II)

Kenji Suzuki

Interpreting a Japanese folklore “Wolf’s Eyebrows” from a depth psychological point of view, I speculated about ESP, especially intuition and images.

When we want to have an ESP, it is necessary for us to stop our ego-consciousness, like small children or near-death persons.

Wolves in the story say that they are real human beings who stop their ego-consciousness. Another persons, wolves say, are animals in essence.

Stopping his ego-consciousness, a man shows a tendency to seek for SATORI.

Key Words: ESP, stopping one’s ego-consciousness, true character of human beings